

“先生になってみて” ～新米教師が語る学校の今～

遠藤 拓馬 (千葉市立千城台西中学校)

早川 晃央 (富山県射水市立小杉南中学校)

1 はじめに

「教員として、自分にしかできない指導を通して生徒を幸せにしたい。」

このような想いを持って今年度から教壇に立つことになった2人の新米教師。しかし、待っていたのは理想と現実のギャップであった。学生時代に思い描いていた理想の日々とはかけ離れた毎日を送らなければならない歯がゆさに苦悩する日々。「わからないことがわからない」ながらも、生徒の前では“先生”として奮闘せざるをえないもどかしさ。自分の知識の浅はかさを痛感することによる挫折。毎日が驚きと葛藤の連続である。そんな1年目として感じる今の想い、そして教員としての覚悟や、今やらなければならないことなどの生の声を学生に伝えるべく、今回分科会に登壇させて頂いた。

今回の発表では、発表者が壇上でテーマに沿って意見を述べ合うトークセッションの形式を取った。我々が教員として確固たる実績を築けておらず、まだまだ生徒から多くのことを学んでいる最中であるため、こちらから一方的に語るのではなく、会場全体で共に「教師」という存在について考える場を設けたいと考えたからである。以下に本分科会での発表内容、質疑応答でのやりとりをまとめたいと思う。

2 学級担任として (早川)

私は、現在1年生の学級担任を務めている。担任の仕事を通じて、生徒との関わりの中から学んだことのいくつかを述べてみたい。

▽勤務校の概要

創立は1984年、今年で30周年を迎えた。学校は富山市と高岡市の中間、射水市に位置し、校区には大学医学部の寮、大学の宿舎、低所得者向きの県営住宅群などがあり、開発後20年～40年を経た住宅地が広がり、生徒数395の中規模校である。

▽担当学年、クラスの概略と課題

1学年は4クラス、私が担任するクラスは男子16名、女子15名の計31名である。

生徒の特徴として、男子は幼く、女子は早熟である。学級運営はやりやすい反面、授業中、自主的に挙手、発言する生徒は少なく、積極性には欠ける。普段の学級生活において指導を要するほとんどは男子生徒であり、生活指導に時間を要する。一方で可もなく不可もなくの中間層の男子生徒をいかに成長させるかが担任として大きな課題であると考えている。

▽担任としてのやりがい

担任となって、私が大切にしてきた次の4点について実践に触れたい。

第1に生徒との面接や雑談を通して、生徒個々の環境や考えの理解に努めたことである。昼休みや放課後なるべく教室に行き、多くの生徒と触れあうようにした。全体の前では大人しい生徒も個々にはさまざまなことを話してくれ、信頼関係を築けている。

第2に週に1枚の学級通信の発行である。実際に発行してみるとこれは、クラスのまとまりを形成

する意味で実に有効であった。生徒の意見や感想、写真を載せることでクラスの全員が共有できる。発行する度に、ほとんどの生徒がその場で目を通してくれ、1週間のクラスの出来事を振り返ることが出来る。また、保護者も学級での様子や出来事が伝わるとして好評をいただいている。さらに「あのときこう書いた」というようにフィードバックの指導も可能である。

第3には学級文庫や学活等の学級裁量の時間の活用である。学級文庫として、自分が生徒に読んで欲しい本を並べることで私が目指すクラス色の形成を期待している。また学級裁量の時間は、様々な企画の計画、実行を通して、生徒の自主性、積極性を見ることが出来る。生徒理解やクラスのまとまりを深めることができる貴重な時間であることを実感した。

第4は席替えである。席替えで大切にしていることは、不公平感を生徒に感じさせないことはもちろんだが、ひとりひとりが自己有用感や自己肯定感を高める座席配置を考えている。誰にどのような役割を期待するか、また座席関係からこちらが期待した役割を生徒が各々に果たしてくれることで、クラスのリーダー育成も可能である。

▽担任として見えていなかったこと

一方で担任として見えていなかったことも多い。生徒指導に関することや事務処理に関することでその事例を挙げ、問題点を探ってみたい。

- ・4月、職員室にクラスの女子生徒の机に落書きがあると生徒が言ってきた。教室に行くと落書きをされた机の生徒が泣いていた。
- ・7月、帰りの会の前に1人の男子生徒が突然、廊下で嘔吐。
- ・運動会や合唱コンクールの練習中に、特定の男子生徒がふざけている。
- ・道徳の授業中に、分かっているがきまって道徳的でない発言をする生徒がいる。

また、日々の出席簿の管理や通知表の所見の記入など、学生時代には見えていなかった事務的な仕事も多い。

これらの事例に対処することは、教師にとって日常茶飯事であるが、当初は生徒にどのように声をかけてよいのか分からず、その都度、先輩の先生方に教えてもらい解決してきた。このようなことがある度に教員はチームとして生徒を伸ばすために協力していることを実感するとともに、教育者として「教」の部分に関わることは比較的容易であるが、更に「育」への支援ができる教師となるためにはまだまだ経験が必要であるとも痛感した。

▽これまでに担任として学んだこと

以上に述べてきた事例等をおして、担任として学んだことは次のことである。

第1に「その指導が生徒の心に寄り添ったものとなっているか？」といつも指導の後は振り返る。そのための声かけはいつもポジティブでなければならない。「廊下を走るな」という否定の言葉ではなく、「廊下を歩きます」という肯定的な指導が有効である。

第2に保護者との信頼関係を結ぶことが大切である。生徒の後ろには常に保護者の方がいる。保護者との信頼を深めると学級運営がやりやすくなる。生徒の長所を伸ばし、生徒のよさを見いだすことで、保護者と信頼を築けるようにしている。

第3に生徒を縛りすぎない、「見逃す」勇気が必要である。生徒を信頼し、時には生徒に自らの誤りを気付かせることで自主性を伸ばし、そこでまた、生徒も教師を信頼することになる。

3 着任してみた（遠藤）

2013年4月1日、いよいよ着任の日を迎えた。慌ただしく朝の打ち合わせを終えると、そのまま職員会議が始まった。そこで思いがけず、今年度の国語科主任を任されることが通達される。「30歳までに教科の知識を貯え、40歳辺りで国語科主任として学校を引っ張りたい」と漠然と考えていた目標が初日から現実となる。まだ一度も教壇に立ったことの無い私が、この1年の学校全体の国語科の指導方針を決定する立場になるなど、この時、初任者であっても一人の「先生」として見られることを強く実感した。これを皮切りに、仕事の流れが全く分からず右往左往する日々が始まった。

自分なりに専門教科についての知識や人と関わることの経験を積み、教員の仕事について考えていたつもりでも中学校の現場は思っていたものとは違っていた。授業内で一つの言葉を伝える際にも生徒の成長のレベルが掴めず、難しい言葉を羅列してしまい納得させられないことがあった。だからといって消極的になっていると仕事は回ってこない。自ら前に出て自分からことを起こすことが求められる。しかし、「わからないことがわからない」状況であるため何を聞けば良いのかわからず、また右往左往する毎日。当時の日記を振り返ると、

「授業が怖い。授業がしっかりすることで信頼が生まれるのに、こんなんじゃ『つまらない・わからない』という烙印を押されてしまう。レベルが分からない。どんな授業をすればいいのだろう。」

「相変わらず自己開示できていない。仕事を落ち着いてこなせていない。何かやる時に、常に浮き足立っている。自分はこんなもんだったのか。もっと出来たのではないか？」

と、今にも共通する部分はあるが、相当病んでいたようである。

また、未だ半年の教員生活を通して感じたことは、時間の無さである。朝7時からバドミントン部の朝練に参加し、担任を持つ2年目の方等と共に21時過ぎまで仕事をする毎日。始業時刻になると短いスパンで朝読書、朝学活、授業、給食、昼休み、清掃、帰学活、部活・・・と1日が過ぎていき、生徒とじっくり対話する時間が取れないまま1日が終わる。加えて不器用な私は、なかなか一つの仕事に時間を掛けすぎてしまったり、プライベートを充実させる余裕がなかったりと、気付くと日々の振り返りをする間もなくあっという間に1週間が過ぎていく。このように、周りについて行くので精一杯な毎日を送っている。ここから一つ一つの仕事を如何に効率よくこなし、無駄を省いて生徒に向き合うかが大切であることを痛感した。現在私の学校の生徒はとても素直で真面目であり、生徒指導にはほとんど困っていない。3学年の先生方も実力者ぞろいであり、他の職員の方々も暖かく、職場には心から恵まれていると思う。そのような環境下で、来年度は担任を持たせてもらえるという噂が出ており、加えて部活も主顧問を務めることになる。今年以上の仕事量が待ち構える中、その準備を今のうちからいかに出来るか、この後期が大切であると切実に感じている。

4 社会科教員として（早川）

現在、私は1年生の社会科の授業を週に12時間、他に学活、総合、道徳を加え、17時間の授業を担当している。また空き時間は生活ノートへのコメント書きやセミナー学習や自主学習ノートのチェックに費やすことが多い。

生徒との信頼関係を結ぶ上で最も重要かつ根底にあるのは授業である。特に社会科の場合は、地歴

公民の分野を問わず、知識理解の教え込みに陥りがちな教科である。いかにして生徒の関心を育て、資料を活用し、思考力を深めるか、教師の力量が問われている。

私が授業の実践や研修を通して学んだポイントは次の4点である。

第1に毎時間の授業において、その授業におけるポイントを明確にし、本時の課題と前時とのつながりが分かる授業であることが大切だと思う。

第2にゴールが志望高校への合格ではないことを意識している。特に社会科へ関心の高い生徒はさらに深く考えられるようひとつの出来事をさまざまな人の立場から考えたり、時には、「高校レベル」と言いながら発展的な話をすることもある。

第3にアフターノートの活用である。これはテストの復習ノートであるが、論点を整理するのに有効だ。社会的事象に対する流れを把握し、問題に取り組むことで理解度や定着度は高まる。そのために整理できるような復習ノートの製作を3年間続けて指導したいと考えている。

第4に生徒のノートを、プリントに活用することである。生徒のノートにはポイントがよく整理されているものがある。それを用いることで、教師のプリントにはない刺激があり、互いの刺激となって、学び合う関係ができるとともにプリントに使われた生徒は自己有用感が高まり、さらなるモチベーションとなる。

以上のポイントを通して、最後にまとめる。社会科の学習の主眼は、これからの世紀をいかに生きるかを考える力をつけることにありと考えられる。地歴公民の分野を問わず、常に現代社会を取り巻く問題に関心を向けさせることが重要である。そのために私は定期考査に時事問題を必ず10点分は出題するようにしている。

明治大学の地理学専攻で学び、さまざまな民族が共に生きることの難しさは十分に認識しているつもりではあるが、これからの21世紀を担う生徒が自ら選ぶべき方向性をしっかりと見据える力をつける基礎を中学校の社会科で養えるようこれからも研究と修養を怠らないようにしていきたい。

5 グループワーク、質疑応答、感想から見る参加者の考え（一部抜粋）

▽グループワーク「授業ってどういうもの」から

- ・ まず、教師が自信を持って生き生きと話すことが大事だと思う。そこから一方的に教えるのではなく、生徒と教師の立場を踏まえた上で、互いの意見を交換できる場として授業を構成することが大切だと思う。（国際日本学部1年）
- ・ 教師が何を伝えたいかを明確にする。生徒が何を知りたいのかを汲み取る。この両輪を達成するため、メタ的な視点（授業を俯瞰して見ることが出来る第三者的視点）を持って授業に臨むことが大切ではないだろうか。（商学部3年）

▽質疑応答から

- ・ 一回の授業にどれくらいの準備時間をかけるのか。
最低でも3時間くらいはかかります。中でも社会科は適切な資料がなかなか見つからず、本やインターネットから生徒のレベルに合った資料を探すのに時間がかかっています。今は何年か後に転勤になった時の学校での授業のことも見据え、多めに資料を集めているので、そうすると1回に3時間程度かかってしまいます。（早川）

- ・ 社会科，国語科教師としての最終目標は何か。

スケールが大きいので2人とも少し考える。まだ駆け出しであるため，今の時点での目標を宣言する。「先生のおかげで点数上がった！」という声を多く聞けるようにすること。(早川)

10年後に「遠藤の国語の授業を受けていて良かった」と思ってもらえるような存在になること。(遠藤)
- ・ 不登校児との向き合い方で工夫していることはあるか。

私が受け持っている生徒は対人関係に問題を抱えている子なので，特別支援の先生と協力しながら1対1で向き合うようにしています。その中で，「朝しっかり起きて週2日は学校に来る」などの低い目標を設定してあげるなど，生徒の成長を焦ること無く，3年間という長い目でその生徒のこを見つめ，一つでも出来ることを増やせるように接しています。(早川)
- ・ 「教員は生徒と同時に自分も大切にしなければならない」というお話を以前伺った。敢えて仕事を「やめること」の基準は設けているか。

教員の仕事を全て経験している訳ではなく，見えていない部分が多いので，今は正直分からないです。「全てのことに全力で」という気持ちを持ってはいるが，「最低限してあげられること」の基準を模索して行きたいと思っています。(遠藤)

月に1日は全休日を作り，それを目指して仕事に取り組むようにしています。担任業務に関しては，1学期に厳しく指導し上手く行かなかった反省を生かし，「あきらめる勇気」を意識するようになった。(早川)
- ・ モチベーションが低い子にはどのように接するのか。

部活動の顧問からの指導は生徒にとって大きい効果があるので，他の先生方と連携しながら教育活動全体で生徒に向き合うようにしています。(早川)

モチベーションが低い生徒こそ「認められたい」という想いを強く抱いているのでは無いかと思います。本当は授業内での発表や普段の活動などで成果を出し褒められたいが，それが出来ないため問題行動を起こしがちであるように思います。なので，廊下ですれ違った時や休み時間などにその子の得意な活動についての賞賛をしてあげることで，少しずつ達成感を与えてあげるようにしています。(遠藤)
- ・ 生徒との関わりの中で一番うれしかったことは何ですか。

生徒から暑中見舞いをもらったことです。自分が指導した手紙の書き方をしっかりと用い，「遠藤先生の授業が楽しいです」とそこに書いてくれたのを見て，「まだ何もしてあげられてないけれど，彼女の中で自分が国語の先生として認められた」ということを実感しました。(遠藤)

連絡帳に「社会の授業が楽しいです。」と書かれていたのを見てとてもうれしく思いました。やはり，授業での生徒との関わりは格別のものがあると思います。(早川)

▽分科会後の感想から

- ・ グループワークなども含め、積極的に参加できる形を取って頂きありがとうございます。改めて自分はどうして教師になるのかについて考える機会となりました。まだまだ不安や悩みを抱えた身ではありますが、色々な経験を積んで行きたいと思います。
- ・ 教員の負の側面がやたらと強調される昨今、今日ほど「教員は楽しい！」というメッセージを伝えてもらったことは「宝」です。ありがとうございました。
- ・ 初任の先生ならではのリアルな現状をたくさん聞くことができ、予想外なことにたくさんぶちあたりながらも生徒と一緒に成長できる教員の魅力が伝わって来ました。また、「わからないことがわから ない」という状況から自分に当てはまる未来像が浮かんだので、積極的な姿勢で物事を吸収して行こうと思いました。
- ・ 授業を学習的な面でどう教えるかという話ではなく、日々の生徒の様子や同生徒と接して行くかについて聞くことが出来たので、これまでの話と違い、とても貴重な時間を過ごすことが出来ました。
- ・ 若さあふれる発表でとても良かったです。「特別支援」の子ども、「ピンキリ」のキリの子どももの辛さや悲しみが実感できる人であり続けてください。これからの期待します。

6 おわりに

今回の発表では「私たちが何かを伝える」というよりも「参加者と共に教育について考える」というテーマを持って登壇させて頂いた。分科会後に行ったアンケートではたくさんの前向きな感想を頂いたが、逆に私たちが普段行えていなかった日々の実践の振り返りをする機会となり、感謝の思いでいっぱいである。日々生徒からたくさんのことを共に学んでいる教員生活であるが、今回の発表でも多くのことを共に感じ、学ぶことが出来たように思う。まだ見ぬ教員生活の醍醐味に向けて、目の前の物事にひたむきに向き合う決意が固まった時間であった。

先に述べた通り、我々2人は日々の業務に追われながら何とかそこに食らいついでいるのが現状である。事前に満身に準備が出来ないまま臨んだ本番であったが、足を運んで頂いた参加者の方々が熱心に話に耳を傾けながら、こちらが話しやすい空間を作ってくれたことで、新米教師のありのままの姿をお伝えできたように思う。進路に迷う学生や1, 2年生が教員という仕事について何かしらの理解を深めることが出来たならば幸いである。